

KYOJO CUP 第3戦 FCR-VITA 第3戦 富士

2023年9月23日(土)～24日(日)
富士スピードウェイ (静岡県)



KYOJO CUP は攻めて7位に
反省点はあるながらも着実に前進

FCR-VITA QUALIFY

5月に開幕した2023年のKYOJO CUPは、第3戦を迎えた。今シーズンから挑戦をはじめ、第1戦、第2戦とさまざまな学びを得てきたKTMSと富下李央菜は、さらなる成長に繋げるべくまずは9月23日(土)に行われたFCR-VITA第3戦に臨んだ。今回はシリーズとして事前の専有走行はなく、まずは午前8時55分から行われた予選に出走した。

この日の富士スピードウェイは雨模様で、コースイン後雨が降りをはじめており、1周でも早くタイムを出そうとした富下は、すぐさまピットアウトすると、両脚が強くなる前に2分04秒017というタイムを記録。最終的に4番手と好位置につけた。ただ、コースイン時にピットレーン速度違反があり、2グリッド降格のペナルティが課されてしまった。



FCR-VITA RACE



午後0時20分から行われたFCR-VITA第3戦の決勝レースも、コンディションはウエット。グリッド降格で6番手からスタートした富下だったが、ホイールスピニングが大きくポジションダウン。さらに1周目のアドバンコーナーでブレーキを残しすぎたせいか、リヤからスピンを喫してしまった。

それでも追い上げを目指すべく再スタートを切った富下だったが、周囲の車両にペースを乱

され、なかなか順位を上げられない。さらにダンロップコーナーでは、ブレーキングで前車両と接触してしまい、この接触行為のために競技結果に30秒加算のペナルティが課されてしまった。富下は15番手でフィニッシュしたものの、30秒が加えられ結果は25位。レース後に設けられた有料スポーツ走行でタイヤの内圧を調整し好感触を得るなど、富下はこの悔しさを翌日にぶつけるべく、調整を進めた。

KYOJO CUP QUALIFY

明けた9月24日(日)の富士スピードウェイは晴天。前日のウェットコンディションから一転しドライコンディションで迎えた。午前8時25分から行われた公式予選に臨んだ富下は、ややアンダーステアを感じながらも、ライバルのスリップストリームを使うべくアタックラップに向けてコース上でのポジションどりを歩いていった。

ただ、アタックに入る周の最終パナソニックコーナーで他車とのギャップを開けるため、わずかにアクセルを抜いたことが影響したか、スリップストリームを使ったものの2分00秒418というベストタイム。1分59秒台には入れることができず、9番手で予選を締めくくることがになった。とはいえ、シングルポジションではある。決勝に向けて準備を進めた。



KYOJO CUP RACE



午後1時50分から迎えた決勝レースは、午前前に続き晴天のもとで行われた。スタートではほんのわずかに蹴り出しが遅れた感もあった富下だったが、ポジションを落とすことなく9番手につけ、序盤からしっかりとした戦いをみせていった。予選で感じていたアンダーステアも、タイヤの内圧調整を行った結果、好フィーリングに転じていた。

序盤から上位陣は混戦となっていったが、トップ2の争い、さらにその背後の3番手争いが3台という展開。6~7番手はやや間隔が開き、8番手のペースが上がらない。富下はそれに付き合うかたちとなってしまい、4周目にこれをかわし8番手に浮上するが、7番手とはややギャップが広がってしまっていた。そんななか、富下は少しずつ7番手との差を縮めていくと、10周目にはこれをオーバーテイク。その後も3~6番手の集団を追いながら終盤のレースを戦っていくと、そのまま7位でフィニッシュすることになった。今季これまでのレースでは、スピンや接触を喫したりペナルティを受けたりと反省材料も多

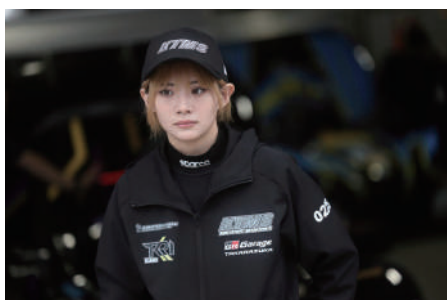
かった富下だったが、今回のレースでは攻めた走りでも接触もなく、ポジションを上げてレースを終えることに成功した。

もちろん、早い周回数からポジションを上げることができていれば、終盤まで接戦だった3番手争いにも食い込むことができていたかもしれない。富下はこの点を悔しがった。

2023年のKYOJO CUPも11月25日(土)~26日(日)の第4戦を残すのみ。今シーズンの成長をしっかりと繋げ、結果を出したいところ。KTMSと富下にとっても集大成の週末となるはずだ。



DRIVER'S VOICE



富下 李央菜 RIONA TOMISHITA

「FCR-VITAの予選では、前のドライバーに遅れたくないとピットレーン速度を見られず、ペナルティを受けてしまうことになりました。決勝ではスタートから遅れ、ヘアピンでのスピン、さらに接触でのペナルティと反省点が多いレースになってしまったと思います。ただ、その後の特別スポーツ走行で内圧を下げたときの違いを理解できたと思います。KYOJO CUPの予選では、アタックラップへの位置取りを学ぶことができました。決勝では、予選でのアンダーステアもタイヤ内圧の調整で気にならなくなりました。レースではトップと離れてしまったので、次戦以降はもっと序盤から抜きたいですね」

